

# まちのお医者さんからの 健康アドバイス

## 往診こぼれ話

開院してもうすぐ20年になります。この地(旧西那須野)で生まれ(昭和28年)この地で育った私はいまだ未熟者ながら患者様の暖かいお気持ちに支えられて医師を続けています。

振り返れば約200人ほどは往診で診させていただきました。その中で最期をご自宅できちんと看取れたのは1割の20人ほどでしょうか。なかなか患者様ご本人の希望どおりにはまいません。

私は週に1回か月に2回くらいしか伺いませんから良いのですが、毎日見られているご家族の負担は大変です。介護保険制度ができたとはいえ、お嫁さんや、配偶者(ほとんど奥様ですが、まれに旦那様)、そして他家に嫁いでいる娘さんが協力して頑張っても最期まで見ていられずに、あるいは、普段あまり顔を見せない遠くの親戚からの進言で入院することになり、ご本人があまり望んでいなかった形で人生を終えることが多いのです。20年やっての感想は『人ひとり看取るのは大変な事』ということです。

あるおじいちゃんです。平屋の大きな家で日当たりの良い広い居間がある極めて良い環境に住んでいらっしゃるのですが、ご本人は息子夫婦とはうまくいかず一人暮らしです。脳梗塞で右半身が不自由です。ご飯は一人で何とか食べられますが、洗いものはできません。ヘルパーさんが週に1回、私が週に1回行くだけで家族はめったに顔を見せません。おそらく諸事情があつてのことでしょうが、結局お一人で誰にも看取られずに亡くなりました。お金があつてもどうにもできない無常さを感じます。

このコーナーでは、三師会(医師会・歯科医師会・薬剤師会)から市民の皆さんにあてた、健康や病気についてのアドバイスを紹介しています。

第31回

小沼内科胃腸科クリニック 院長 小沼一郎

それと対照的ですが、小さな日当たりのあまり良くない家で、娘夫婦(どうも養子のような)と2人のお孫さんに看取られて穏やかに(少なくともそういう顔をして)亡くなったお婆ちゃんがあります。彼女は私が幼い頃から知っている人で、いつも大きな籠を背負い野菜やら果物やらを行商していた人で、私が開業してからは私を頼りに通院してくれていました。脳梗塞に倒れ自宅で寝たきりの状態になり、息子さん夫婦の要請で往診していました。

ご夫婦の献身的なお世話ももちろんでしたが、私がかつとも感動したのは、私が往診を終え、その家を出たときに「先生、ありがとうね」と近所の旦那さんにお礼を言われたのです。びっくりすると共に涙が出てきました。家族にも最近はお礼を言われないこともあるのに、ご近所の他人が私に往診のお礼を言うのです。地域で人を守る姿勢に驚き、この地域の良さを再認識しました。「医師をやっていて良かった。ここに帰って来て良かった」と思いました。

平成21年 初秋に。